

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

億トレⅢ

プロ投資家のアタマの中

億を稼ぐ
トレーダーたちⅢ

Tomoyuki Hayashi

林 知之

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

本書は、原則として、インタビュー当時の情報に基づいています。
また、投資の判断は自分自身の責任において行ってください。

はじめに

トレードのメンタルとはなにか？

このインタビュー集の価値はなにかと問われたら、投資家としての「進むべき方向」を決める、あるいは再確認するための最高の「素材集」だという点を挙げたい。

多くのトレード実践者が、「最後はメンタル。心の問題だ」と口にする。個々の売買判断も、そもそもどんな手法で利益を狙うかを決めるのも、さまざまな感情を伴う心の問題だからである。

では、滝に打たれて修行すると儲かるようになるのか。苦しい場面を乗り越えるために「不屈の精神」を身につけるべきなのか……そんなはずはない！ 崇高な精神の持ち主になる、すべてに達観する……これもちがう。超人的な精神力を手に入れたり、感情を捨てた「売買マシン」になろうとするのは自由だが、ほとんどの投資家は実現できないのだから、私はオススメしない。

株式市場で儲けたカネは、有意義に楽しく使いたい。人間くさい存在のまま、ちよつとリッチになりたい。勝ったら笑顔を浮かべ、負けたときは悔しがる——私はそんなベタな人間、相場が上手な「俗物」を目指している。これを極めるのが、私のゴール（目標）である。

つい目先の利益に目を向けてしまうのが投資家の「本能」だが、それは売買の場に立ってから働く本能だから、いわば人工的な株式市場に臨むうえでは事前に、どこに向かうか、どんな投資家を目指すかを、脳ミソで考えておく必要がある。

「一般的な投資家の多くは、ゴール（目標）をもっていない。そこが最大の問題だ」

本書の前作である『凄腕ディーラーの戦い方』の中で、職歴豊富なプロ投資家である坂本慎太郎氏が大切だと強調した「トレードに対する姿勢」である。「とにかく儲けたい」では、いかにも子どもじみている。例えば「1億円儲けたい」と具体的な金額を設定し、「では、実際にどうするか」と落とし込んでいくのがオトナのゴール設定だといえる。

投資、トレードという行為を高い視点から眺めると、目先の利益を追う行動もアクセサリ的なものなら、トレード手法を選ぶ行為もアクセサリである。日々の市況解説や、ちよつとした予測情報など、否定しようのないアクセサリだ。

それらアクセサリをちりばめる本体、骨組みをつくるのがゴール設定であり、私たち自由個人投資家は、感情を殺すのではなく、感情を生かしてゴールを想像し、頭の中でリアルな映像に高めることで、真の意味をもつゴールとする。

だが、「株で1億円つくる」と言えば、周囲の人はみな否定する。子を案ずる親は「そんな夢みたいなことを言うな」とたしなめ、隣のオバちゃんは「額に汗して働きなさい」と説教をくれる。

そんな世間のジョーシキも、妥協の世界に生きる周囲の人たちの忠告も、私たち投資家には害ではない。このように整理して、「自分だけで自由に考えよう」とすることこそが、投資家のメンタルトレーニングであろう。

本書に登場するトレーダーたちは、読者一人一人を心配して「やめておけば？」と話しかけたりしない。しかし、雑な物言いをしているわけではない。現役プレーヤーとしてのホンネを、楽しく大らかに語っているのだ。結果として、ダイヤモンドの原石があちらこちらに落ちているというのが、本書の最大の特長だと自負している。

あなたのジョーシキが真実だ

日本では、ごはん茶碗を食卓に置いたまま食べない。茶碗を手にとって、箸で口に運ぶのが失礼のない食べ方である。しかし、海を渡った韓国では、ごはん茶碗を手を持つのがマナー違反だという。その韓国では、食器の中にきれいに並んだ食材を、まぜまぜして食べるものが多いようだが、日本では、まぜまぜする料理があまりなく、少なくとも、伝統的な会席料理などで、まぜまぜするのは御法度であろう。国や地域、状況におけるジョーシキは異なるのだ。

一部の地域には、鳥葬という風習がある。死者の体を鳥に食べさせるのだ。魂の抜け出た遺体を「天へと送り届ける」意味があるという。日本人の感覚で「残酷だ」と言えば、鳥葬を行っている人たちは「遺体を燃やすなんて残酷だ」と言い返すだろう。ジョーシキがちがうのだ。

さて、株式市場では毎日、ほぼ全上場銘柄に値がついている。これは、真剣に考えて「買いだ」と結論づけて行動した人と、確信をもって「売りだ」と決断した人、どちらも同じように存在していることを意味する。真逆のジョーシキがぶつかり合っているのだ。そこに身を置く私たちプレーヤーは、世間のジョーシキに惑わされないように注意しながら、一方で視野を広く保ち、ちょっとした「気づき」を得ることを怠ってはいけない。カネが飛び交う世界では、つい錯覚に陥る。「自分は大丈夫」と思うのもメンタルの強さだが、「きっと錯覚している」と認めるのも強さである。

本書に登場する実践家たちの言から、誰か一人を選ぶのが正しいことではない。同じ人間にはなれないのだから。また、多くの主張が、読者のジョーシキと相容れないだろう。だが、それぞれの人物が、いわゆる完成形であることを尊重し、耳を傾けてみる価値がある。自分にとってのダイヤモンドの原石を、ひとつふたつと拾ってみることに大きな意味がある。

例えば、本書の7番目に登場する秋山知哉氏は、多くのプロが重要性を説く資金管理を、「負けることが前提」と否定的に捉える。だが、かまわずにトレードサイズを膨らませるわけでもない。そんなことをしていたら、今回のインタビューが実現しなかったはずだ。本書の最後に登場するの

は、私が世間のジョーシキを破って収録したプロギャンブラー新井乃武喜氏だが、彼も資金管理を指して「負けることが前提」と言い、「勝つための計算」としてアプローチする。

では、「相場に負けはつきものだから、負けるときのことを考えるべき」という考え方と、どちらが正しいかを議論するべきか？ そうではない。どちらも真実であり、それを真実として成立させるのが、それぞれのジョーシキなのだ。

本書の読み方

冒頭、トレードのメンタルに触れながら、ゴール設定の重要性を強調した。ゴールを決める際のキーワードは、「ジョーシキにとられない思考」「実現可能な妄想」である。

相場本には、具体的な手法を説いたものが多い。だが、落ち着いて観察すると、「今日読んで明日から儲かる」などという無謀な期待、いわば[〃]成立し得ない妄想[〃]に迎合している書籍も多い。そんな玉石混交の中で、自分にとってのダイヤの原石を見つけ、自分のジョーシキで自分だけの真実を築き上げるのが学びだと私は信じる。

少しばかり慌てて利益を取りに走るのが投資家の行動特性だから、あえて立ち止まってほしい。百人百様のジョーシキがあることを考え、タイプの異なるプレイヤーたちが自由に語る[〃]真実[〃]から、ちよつとした気づきを見つけしてほしい。

数時間かけて本書を読み、一つか二つの小さな発見があれば、明るい未来に向かうための武器が手に入るのだ。大いなる可能性のある株式市場で活動することを考えたら、実は「売り」と「買い」しかないシンプルな決断を考えるゲームであることを認識すれば、私が「ダイヤの原石」と評することが決して誇張ではないと理解してもらえらるだろう。

本書のインタビュアーは、一般的な雑誌の記事とは決定的な差がある。私が運営する投資助言会社「林投資研究所」の個人投資家向け機関誌『研究部会報』に連載したもので、スポンサーの都合が入ったり、ページ数の都合でまとめたりしていないのだ。つまり、投資家としての正しいゴール設定と同じで、自由闊達かつたつに情報を盛り込んでいる。だから、裏の裏を読まなくても、文章そのものにダイヤの原石が現れているし、かるく行間を読めば、さらに多くの有益な情報が見えてくる構造だと、自信をもっている。

それぞれのインタビュアーの世代が幅広く、必然的に、トレードを学んだ時代背景も経験値も異なる。特定のコンセプトで集めた人物群ではない。なにしろ、プロトレーダーならぬプログラマーのインタビュアーまで収録しているのだから、著者である私の自由気ままな世界観の中に漂う、自由人たちのホッネを素直に受け取ってもらえると考えている。

ただ、登場する10人のインタビュアーは、最も古いものが2011年8月、最新は2017年12月だから、株式市場の現状や制度に触れた部分は、現在とはちがっている可能性がある。

父・林輝太郎のラストメッセージ

最も古いインタビュアーが2011年8月と述べた。最も相場歴の長い私の父、林輝太郎である。

当時、肺気腫を病んでインタビュアーを細かく数回に分ける必要があるほどだったが、戦後の株式市場や、そこで学んだ哲学を披露してくれた。だが、このインタビュアーを『研究部会報』に掲載した際の校正作業が文章に携わる最後の仕事となり、翌2012年2月28日に他界してしまった。

現在の職業分類では「独立トレーダー」、昔風には「一匹狼の相場師」、そんな自立した立場のあり方を輝太郎は、インタビュアーの最後の言葉に集約してくれたと思う。

「正しい筋道の単純な練習で相場の経験を積み、正しい自己流を確立するんだよ」

これを現代風に表現し、科学的な要素を入れると、前述したゴール設定と重なると思うのだ。

しかし、輝太郎のインタビュアーは、校正で読み直すたびに、不思議な「重たさ」を感じた。息子の立場だからかもしれないが、輝太郎の著作に慣れ親しんだファンには貴重なラストメッセージである一方、文章化した私の世界観にゆがみがあったかもしれない。この一点が唯一、本書における懸念であることをお伝えするとともに、関係各位に感謝の意を表してまえがきをとじる。

2018年2月

林知之

林輝太郎

無数の個人投資家と学びを共有してきた戦後の60年

「正しい自己流を確立せよ！」

1. まずは生きること
 2. 新宿の顔
 3. お兄さん、株買いなよ!
 4. 台所のない家
 5. 実践者からの教え
 6. 取れるものなら取ってみやがれ!
 7. 相場以外は全部ダメ
 8. 職人の売買、うねり取り
 9. サヤ取りは相場ではない
 10. 完全なシステムなんてない
 11. 相場は科学ではない
 12. 単純化と練習
- 〈追記〉

若林栄四

半世紀に及ぶ経験をベースに相場の真理に迫るベテラントレーダー

「相場は自ら動いているのです」

1. 相場とは何か
2. 相場は日柄である
3. 日柄は土日も含める

夕風

(ゆっなぎ) イベント投資で年間40%の利益を稼ぎ出す個人トレーダー

「利益は分析と研究、そして経験の結果です」

1. 需給バランスの崩れが狙い目
2. 悪材料の急落は買い
3. 相手が誰なのか
4. イベントは必ず起こる

金子稔

完全独学で手法を確立した日経225先物トレーダー

(ついでに仙人)

「チャートは出来るわいるいカーナビなんだ」

1. お決まりの道を行く
2. そして3人だけになった
3. 余命宣告
4. 80%はトレンドレス
5. 学びの場
6. 感情がわかる
7. 出来るわいるいカーナビ

山田良政

精力的にEA開発を続ける元裁量トレーダー

「答えはシステムと裁量の融合です」

1. スタートは昭和のアナログ作業
2. 自己の判断で敵る
3. 手法の確立
4. FX、そしてシステムトレード
5. ヒトの限界とシステムの限界
6. スキャルピングのシステムは損をしない?
7. トrendトって何?
8. 人間の弱さを補うのがEA

照沼佳夫

独学でゼロから道を切り開いたシステムトレードのバイオニア

「気が小さいから順張りが基本なのです」

1. 学生時代に相場の道を目指した
2. 下げ相場で退場
3. すべての指標は役に立たない
4. 気が小さいから順張りなんです
5. 不安はあっても迷いはない

秋山知哉

静寂な山あいに居を構える独立トレーダー

「絶対に勝つ、人たちの都合を考えるのです」

1. 予備校で覚醒した
2. 千数百万円が消えた
3. 勝つことを前提にする
4. きれいなチャート
5. 絶対に勝つ人の都合

高山剛

五感と金融工学と禅の思想で臨むオプション取引の専門家

「予測ではなく目の前の事実を見ることです」

1. 禅と出会う
2. 事実を見る姿勢
3. ポジティブ思考の意味
4. 値動きってどんなもの？

平田和夫

ヘッジファンドの最前線を知る経験豊富なトレーダー

「相場が大好き。だからこそトレードを楽しみたいのです」

1. ひよんな就職から輝けるキャリア
2. 利食いたいところで買え！
3. 相場の面白さと難しさ

新井乃武喜

世界のカジノで15年以上勝ち続けてきたプロギャンブラー

（プロギャンブラーのぶま）

「トビラを開ける前に勝負を決めろ！」

1. 運だけに左右される状況はイヤだった
2. 正しい勉強を経て自分のものをつくり出す
3. トビラを開ける前に勝負を決めろ！
4. 10年続けるシゴト
5. 「どうしたいんだ」という自分の答え
6. 決め手は「本気度」

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

インタビューのプロフィール

林輝太郎 (はやし てるたろう)

1926年10月17日生まれ。陸軍士官学校第61期生。法政大学経済学部および文学部卒業。1948年、平和不動産10株を92円50銭で買い、利益をあげたのが初めての相場。1955年、東京穀物商品取引所仲買人・隆昌産業株式会社に入社。1962年、ヤマハ通商株式会社を設立。東京穀物商品取引所の受渡処理委員、資格審査委員および東京穀物商品取引員協会の理事、監事を歴任した後、1972年に林輝太郎投資研究所（現・林投資研究所）を設立。相場における専門は、FAI投資法、うねり取り（株式）、サヤ取り（商品）。著書多数。

若林栄四 (わかばやし えいし)

1966年東京銀行（現・三菱東京UFJ銀行）入行。シンガポール支店、本店が替資金部およびニューヨーク支店次長を経て勲角証券（アメリカ）執行副社長を歴任。現在、ニューヨークを拠点として、ファイナンシャル・コンサルタントとして活躍するかたわら、日本では株式会社ワカヤバシ エフエックス アソシエイツ（本邦法人）の代表取締役を務める。『人為バブルの終わり』（ビジネス社）、『黄金の相場予測2017』『富の不均衡バブル』（日本実業出版社）、『異次元経済 金利0の世界』（集英社）など著書多数。

夕風 (ゆうなぎ)

電気通信大学卒。1996年に渡米し、アメリカ人技術者と共にインターネットプログラム開発に参加。同時にインターネットを利用した株式投資に目覚める。株式投資の研究成果を発表する場として「ダントツ投資研究所」を2004年に開設。「ダイヤモンドZ A i」主催のミニ株バトルにおいて2007～2008年大会で優勝、個人投資家としての実力を示した。主な著書に『イベント投資でゆったりはじめる“夕風式”株式システムトレード講座』（技術評論社）、『スタバ株は1月に買え！』（東洋経済新報社）などがある。

金子 稔 (かねこ みのも) / ついてる仙人

個人投資家から絶大な支持を得る「相場塾」を主宰。“ついてる仙人の「株式投資」「日経225先物」と「ありがとう」で幸せになるブログ”では、株式と日経225先物の売買記録を随時公表し、値動きの予測やその日の売買のタイミングなどを情報発信して人気が高い。また、独学で築き上げたテクニカル分析とトレード手法は定評がある。主な著書に『株・日経225先物・FX……すべての答えはチャートにある！』『日経225先物 ストレスフリーデイトレ勝利の方程式』『日経225先物必勝トレード術』（アールズ出版）などがある。

山田良政 (やまだ よしまさ)

株式会社オフィサム (<http://offi36.net/>) 代表取締役。2011年、ひまわり証券で実稼働されたトレードシステムの年間成績ランキングで、1～6位、8～10位を独占。2012年には「選択型自動売買サービス・エコトレFX」に数多くのシステムを提供し、利用者数1位、年間成績1位を獲得。2013年には自身が開発したトレードシステム「Aznable++（ドル/円）」が、ミラートレーダー（世界中のEAを集めたプラットフォーム）に導入されている全世界8000以上のトレードシステムの中から、年間最優秀ストラテジー賞を受賞。

照沼佳夫 (てるぬま よしお)

1950年、茨城県生まれ、駒澤大学経済学部卒業。大学時代に株式投資を始め、投資一筋で現在に至る。その間、さまざまな投資技法の研究を重ね、数々の運用システムを開発、独自の運用スタイルを確立する。1990年にSPS研究所を設立、その代表となる。日本におけるシステムトレーダーの草分け的存在である。主な著書に『株の短期売買実践ノート』(同友館)、『ペア・トレード/裁定取引で儲ける!』『システム売買 プロのノウハウ』『仕掛け・損切り・利食い プロのノウハウ』(日本実業出版社)などがある。

秋山知哉 (あきやま ともや)

1974年生まれ。職業は投資家、相場師。研究医を目指したこともあったが、医大専門予備校時代にトレーダーとして生きていくことを決意。弱冠20歳で独立トレーダーとしての生活を始める。商品先物のトレードで築き上げたオリジナルの売買手法を基に、現在は、FXをメインの投資対象としながら、日経225先物も手掛ける。本文でも紹介している「マーケットでは、“絶対に勝つ人の都合”で値動きが決まる」「勝つ人の視点でチャートを眺める」という独自のアプローチは、あらゆる投資家にとって示唆に富んでいる。

高山 剛 (たかやま つよし)

1984年、山一証券に入社。1987年に、かつてイギリス四大銀行の一つであったミッドランド銀行に転職。外国為替や銀行間資金市場でディーラー人生を開始。その後、金利トレーディングの債券取引、債券先物取引、金利スワップおよびオプションと、デリバティブ・ディーラーとしてのキャリアを重ねる。国内外の銀行・証券にて20年以上、デリバティブのトレーディングや金融工学を活用したリスク管理業務などに携わってきた実績がある。個人投資家向けに「多くの人には逆さに見えても #INVESTUDY」というブログを執筆中。

平田和生 (ひらた かずお)

慶応大学卒業後、勸角証券(現・みずほ証券)に入社。日本とロンドンにて10年間勤務。その実績を買われ、ドレスナーの投資銀行部門にヘッドハントされる。圧倒的な実績で活躍した後、当時、米国三大投資銀行の一つであったメリルリンチ証券に移籍、12年にわたって「トップ・セールストレーダー」として活躍した。3年間のミニリタイアの後、シンガポール三大銀行のUOBアセットマネジメントジャパンの代表取締役社長に就任。国内では、日本投資顧問業協会の副部会長を務めるなど、国内外で幅広いネットワークを構築。

新井乃武喜 (あらい のぶき) / プロギャンブラーのぶき

1971年、東京都生まれ。旅を愛するプロギャンブラー。25歳の時、「勝負で勝ちながら、世界を旅する」と決意。以来、カジノで勝ち続けながら、15年間で82カ国、500のカジノをめぐる旅を制覇。年間の勝率自己ベストは9割。震災ボランティアを目的に帰国した後、メディア取材・講演依頼が殺到。テレビ番組やトークイベントへの出演を精力的にこなすかわら、現在は、書籍の執筆やセミナー講師などの活動にも力を注ぐ。主な著書に『ギャンブルだけで世界6周』(幻冬舎)、『勝率9割の選択』(総合法令出版)などがある。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

林輝太郎

無数の個人投資家と
学びを共有してきた
戦後の60年

「正しい自己流を確立せよ！」

業界の知人、また知人からの紹介で多くの実践家をインタビューしてきたかわたら、最も身近にいる成
功者、私の父である林輝太郎をインタビューの相手を選んだ。

聞いてみたかったのは、長年にわたってマーケットを見てきたプレーヤーとしての目、そして多くの投
資家と接してきた指導者としての目には、何がどのように映っているのかだった。

インタビューは2011年8月、肺気腫のために長く話すのがつらいことに配慮し、自宅で何回にも分
けて行った。

1. まずは生きるべし

——プロフィールには、「平和不動産10株を92円50銭で買って利益を上げたのが初めての相場」とあるよね。これは何年のこと？

昭和23年（1948年）だ。

——22歳になる年だよ。終戦から日も浅いし、まだ若かったわけだけど、いったいどんな状況だったんだろ？

戦争に負けて間もなくで、日本はまだアメリカ軍に支配されていたころだ。復興へのエネルギーがあつたといつても、多くの人にとっては厳しい状況だった。誰にとつても、まずは食べるためにどうするか——そういう世界だったんだな。

オレも食うためにヤミ屋をやったりしたんだが、幸いにも軌道に乗って、少し余るくらい稼ぎがあつたから、それをさらに膨らませようと考える株を買ったのが、相場の世界に入るきっかけだったな。

――終戦の時は、まだ士官学校の学生でしょ？

卒業の間際で終戦になったんだ……あと半年も戦争が長引いていたら、新米将校として前線に行かされ、砲弾が飛び交う中でオロオロしていただろうなあ。8月に日本が降伏して戦争が終わったので、前倒して卒業ということになり、とにかく自宅に戻ったんだ。

――学校は、自宅から遠かったの？

本来の学校は、埼玉県の朝霞だ。現在、自衛隊の駐屯地がある場所だな。自宅があった杉並区高円寺からは遠くなかったけど、戦況が悪化して士官学校ごと埼玉県の小川町に疎開していたんだよ。士官学校が疎開するなんて、完全に負け戦の状態最後まで頑張っていたんだから、ひどいものだ。それはともかくとして、小川町の士官学校から電車で、八王子と立川を経由して高円寺まで帰ってきたんだ。電車はいつも満員状態だったが、ちゃんと動いていたね。

でも、高円寺で電車を降りると、辺り一面が完全に焼け野原だ。家族に会うことを思いながら久しぶりに帰ってきた身としては、電車を降りるなり駅周辺の惨状を目の当たりにして正直、不安になったな。今は、小さな商店が密集するにぎやかな商店街がいくつもあるが、その時は、駅から数キロも離れた場所まで見渡せるほどだった。

とにかく家の方向に歩いて行くと、住んでいた場所の少し手前から、焼けずに残っている家が増

えてきたんだ。それでも不安で、いろいろなことを考えながら黙々と歩き続けた。そして最後の路地を曲がったところで、自宅が無事に残っているのを見て、本当にホッとしたよ。

——士官学校から自宅に連絡する方法はなかったの？

当時、電話はそれなりに普及してたが、うちには電話なんてなかった。

今ののように、「電話番号を書いてください」「メールアドレスを記入してください」なんて時代じゃない。「電話はありますか？」と、まずは電話の有無を確認するのがふつうだったんだよ。電車で家に戻るしかなかったんだ。

——そして、家族全員で戦後の生活を始めたってこと？

そうなんだが、基本的にはオレが独りで稼がなければいけない状態だった。「産めよ増やせよ」の時代で、オレは7人きょうだいの長男だったから。男はオレと5歳年下の弟の2人だけで、あとの5人は女だ。

オレはきょうだいの2番目。上に1人だけ姉がいて、すでに学校の教師をしていたから、いくらかの収入はあった。でもオレの父親、おまえのじいさんは戦争で職を失っていたから、とにもかくにも大家族で日々の暮らしをなんとかしなければ、という状況だったんだ。

※「産めよ増やせよ」

国家としての生産性向上を目的として、「人口政策確立要綱」が1941年に閣議決定された。その時のスローガン。

——すると、まずは食べ物だったわけね。

その通り。その日に食べるものを調達するのが先決だった。自宅にある着物を持って電車で千葉に行き、農家でサツマイモと交換して帰ってくるとかな。

そのころを描写した映画なんかには、あふれるほどの人が乗って窓からはみ出している買い出し列車が登場するだろ？ あれを実経験したんだ。

リュックサックにイモを詰めて背負って帰ってくるんだが、乗っているだけでたいへんな状態なのに、食料が統制下にあったから警察に捕まる可能性もあった。それに、生き残った人が助け合うなんて余裕はなかったから、苦勞して手に入れた食べ物を盗られてしまうことすらあったな。

そんなふうに日々の食べ物を求めて行動しているうちに、自然にヤミ屋をやるようになったんだ。例えば地方から粉を持って売りに来た人に声をかけ、高円寺のパン屋まで一緒に来てもらうんだ。

そのパン屋でパンを焼いてもらうために粉を預け、その粉を持ってきた人にはその場で現金を渡す。オレは夕方になって再びパン屋に行き、焼き上がったパンを受け取ってヤミ市で売ってわけだ。

いろいろと工夫して、ちよつとしたヒット商品を出したこともあるな。

千葉県の稲毛市に叔父の家があつて、以前そこに海水浴に行った時に海でアオサを拾つたことがあつたんだ。それを思い出し、稲毛まで行つてアオサを採り、よしずの上で少しだけ乾かして高円寺の自宅に持つて帰るんだよ。自宅でさらに天日干しして本格的に乾燥させ、適当な量を袋に入れてヤミ市で売るんだ。1袋1銭だったな。

それが評判になつてお得意さんができたりという具合で、当時の金額で1万円貯まつたこともあつた。終戦直後は極端な物価高騰があつたから比較が難しいんだが、現在の数百万円といったところだろう。

※アオサ

海藻の一種で、青海苔の代用品として使われる。

——ヤミ市でまっ先に扱われたのは食品品だよ。ほかには、どんなものが売られていたの？

食品品にはじまつて、石けんなどの生活必需品かな。各家庭から出た中古の日用品や、軍の払い下げの木綿糸なんかもあつた。

酒もあつたね。水で薄めた粗悪品とか、密造酒の類だ。メチルアルコールで造つた質の悪い密造酒では、飲んだ人が失明したり死ぬこともあつたから、「目散る」と表現されたり「バクダン」なんて呼ばれていたな。聞いたことがあるだろう？

——軍の払い下げって、公式のもの？

いや、どさくさ紛れに誰かが持ってきちゃったヤツだ。

そういえば、あの横井秀樹さんから、日本軍が使っていた蚊帳かやをもらったことがあったな。南方で闘う兵隊のために、戦争末期で物資が足りなくなっただけから作られたものだったから、なんと紙の「こより」を編んだものだ。

オレのオヤジは銀座の安藤七宝店で仕事をしていて、戦争中に休業になつて失業したんだけど、戦後に店を再開するというので働き始めていたんだ。その作業を手伝うために何度か安藤七宝店に行っただが、横井さんがその建物の奥を間借りして「横井商店」を経営していたんだよ。

横井さんは、オレの顔にある蚊に刺されたあとを見て「蚊帳をあげるから取りにおいで」と声をかけてくれて、柿の木坂かどこの横井さんの自宅までもらいに行っただ。あれも、横流し品みたいなものだったのかもしれないな。

ちなみに、オレが士官学校を出る時に教官から「好きな物を持っていい」と言われ、教科書や毛布、軍服なんかを持って帰った。

中には、馬を連れて帰ったヤツもいた。食べちゃったかもしれないし（笑）、馬を使って何か商売をしたのかもしれないね。銃器はすべて「埋めていけ」って指示だったが、こっそりと鉄砲を持ち帰った同期のヤツがいたなあ。

何十年後かの同窓会で会った時は、たまに人のいない山の中で撃っていたなんて話してたよ。

——ヤミ市の摘発もあったわけでしょう？

もちろんだ。食料は配給制だったからな。だけど、配給品では全く足りずにヤミ市での流通が多
くの人の命を支えていたのが実態だった。だから、本質的には公認みたいなものだった。

そんな状況下、違法は違法ということで摘発があった。うまいこと事前に情報を得ていた者もい
たけど、オレは警察にワイロを渡してなかったので摘発の情報を得ることができず、苦勞して焼い
てもらったパンをそっくり持つていかれたこともあった。

警察の人たちも同じように飢えていたから、自分たちの食料を手に入れるために摘発を行ってい
たんだ。そうやって争いながら、みんながたくましく生きていた時代だったんだよ。

だから今のようにな、きれいに生きようとしてもムリだった。山口良忠という判事が、食糧管理法
違反の被告を担当しているうちに正義を貫こうと決心し、闇米ぐみこめを食わずにいた結果、栄養失調によ
る肺の病気で亡くなった、なんて実話があったな。たしか、彼の死後かなりたってから報道され
ただけど、とにかく厳しい時代だった。

2. 新宿の顔

——ヤミ屋の摘発で、連行された経験は？

あったよ。士官学校から戻って大学に通っていたので、ヤミ市で買った学生服を着ていたんだ。そのほうが「逃げられる」と考えたわけだ。制服の効果はあったと思うんだが、器用に立ち回ってはいなかったの、逮捕されて「とんだアルバイト」なんて新聞に報道されたこともあった。

その時は密造酒を甲府の農協に売る業者の手伝いをしていたんだが、1週間くらい拘留されたな。でも、捕まって品物を取られて一晩くらい留置されて……それくらいは当時、当たり前だったね。何度も経験したよ。

——そういえば、法政大学の経済学部と文学部を卒業してるよね。終戦後、すぐに入学したの？

士官学校からの編入制度があったので、それを利用して大学を受けたんだ。東大に入ろうと思っただけで落っこちて、法政大学に入った。「東大卒」じゃなく、「東大志望」だな（笑）。

夜間で法政大学に通い、昼間はヤミ屋の仕事。戦争に負けてポロポロで、日々の生活が最優先の中、勉強しなくては、英語くらいできないとダメだ、という考えだったわけだよ。多くの人が同じ

ような気持ちだったと思う。

オレは、経済学部を出たあと学士入学、つまり3年生からの編入で文学部に入ったんだ。

——ずっとヤミ屋をやっていたの？

それなりにうまくやっていたが、ヤミ屋を続けるよりもちゃんと就職したほうがいいってことになったんだ。だから、英文タイプを習って進駐軍に勤めた。「通訳兼タイプピスト」って肩書きで就職して、給料をもらったよ。

——戦争中は、同盟国だったドイツの言葉も含めて、横文字の使用が禁止されてたらしいけど、英文タイプを習う場所なんてあったの？

戦争中はそういう極端な世界に押し込められ、それを受け入れていた。いや、そうさせられていたんだ。それに、敗戦が決まった時も、不安一色の状態だよ。

でも、マッカーサーが乗り込んできたあとは状況を理解して、「よし復興だ！」という気運が高まったから、占領下で日々を暮らしながら、占領されている状況でのビジネスにたくさんの方がエネルギーを注いだんだ。だから「英語を覚えなければならぬ」という雰囲気は社会全体にあって、英文タイプの学校などがどんどんできたのも自然なことだったんだ。

当時の証券取引所だって、そんな復興活動の中にあつたわけだ。今の東証の場所はG H Qに接収されていたので、向かい側の日証館の1階で取引を再開した。「集団売買」と呼ばれた、非公式の立会だよ。

例えばが適切かどうかわからないけど、3月11日の東日本大震災で被災して十分な機能がない状態の漁港で、陸揚げされた魚のセリを再開する、そんな雰囲気だったと思うよ[※]。

兜町でも、みんながヤミ屋をやっていた。山種（山崎証券）の店の中に大きな樽が置いてあつて、そこに味噌が入っていたくらいだ。いろいろなつながりで食料が流通し、誰もがたくましく生きていた。女の人は、ヤミ物資を服の下に隠して妊婦のふりをしたり、そんな光景が当たり前だったね。

※インタビュ어의初回は2011年8月、津波で多くの死者を出した東日本大震災から半年足らずだった。戦争や戦後の混乱を経験している輝太郎は、各地の惨状を憂いながら日々、ニュースを見ていた。だから、復興のために行動する被災地の人たちと、当時の自分が重なったのだと思う。

——ヤミ市で店を出すのはカンタンだったの？

仕切っていた地元のテキ屋から、許可をもらう必要があつたよ。テキ屋の名前は忘れちゃったけど、シヨバ代を集金に来てたね。新宿あたりでは、代金を払った人に木製の「鑑札」を渡していたらしい。

ヤミ市を仕切るテキ屋とのつながりから、別の仕事をしたこともあったなあ。高円寺のテキ屋の上部組織みたいな存在が新宿の関東尾津組で、その親分の尾津喜之助という人が衆院選に立候補したことがあったんだよ。オレはその時、高円寺のテキ屋に頼まれて、新宿の尾津組に行って選挙活動の手伝いをしたんだ。すると尾津組の人がオレの学生服姿を見て、「本当に学生なのか？」と尋ねた。「はい、そうです」と答えると、「学生さんが親分の応援に来た」というので組織の中で有名になり、チャホヤされたりしてね。

そんなつきあいの中で、尾津組の人たちの「先生」をしたこともあったな。文学部で易经を勉強していたことが伝わると、街頭で易者をするテキ屋の人たちを相手に、新宿区百人町の易の学校で講義をしたんだよ。だから新宿を歩いていると、尾津組の人から「先生。いい映画やってるよ」なんて声をかけられたり……新宿の街で「顔」なんて、ちょっと面白い状況だったね。

——**食料品のほかに手がけたものは？**

「ドル買い」をやった。手持ちの米ドルを日本円に替えたいというアメリカ兵からドルを買うんだ。それをまた日本円に戻す、つまり両替商だな。これは、けっこう儲かった。

——**受け取ったドルを、どこで売るの？**

正体はわからなかったけれど、ドルを集めに来る人がいたんだよ。そういう人に渡すだけで、サヤを抜くことができたんだ。

あとは、P X (Post Exchange、米軍専用の売店) に行つてドル紙幣で品物を買うこともあった。日本人は入れないので、アメリカ兵に変装するんだ。アメリカ兵から軍服を譲ってもらい、それを自分に合わせて直したんだよ。日本に駐留していたアメリカ兵の中には日系人も多かったから、きちんと軍服を着ていれば特に怪しまれることもなかった。電車には米軍専用の車両、今の女性専用車両みたいなものがある、軍服で変装し、堂々とそこに乗つて銀座のP Xに行くわけよ。

銀座では、3丁目の松屋と4丁目の和光が接収されてP Xになっていた。松屋のビルにある大きな看板には「T O K Y O P X」という文字が縦書きで入っていたんだ。オレはアメリカ兵になりすまして堂々と入つていき、食料品や日用品をドルで買うわけ。その品物を抱えてP Xから出てくれば、裏通りにいる人たちがすぐに日本円で買い取つてくれたんだ。

当時、「ドル買いは死刑になる」なんて噂があつてね。大学にM P (Military Police、憲兵) のジープが4台入つて来た時は、ドル買いの取り締まりかと思つて走つて逃げた。

とにかく無我夢中で走つて大学の裏の塀を越えたら白百合学園で、そこでは痴漢と間違えられて先生に追いかけられ、さらに隣の靖国神社に逃げた。結局、オレを捕まえに来たわけではなかったとわかつてホツとしたんだけどな。

3. お兄さん、株買いなよ！

——食つや食わずの状態から余裕が生まれ、現金の蓄えも少しできた。そこで相場の世界に入るわけだよかね？

進駐軍に勤めたあとは、「エー・ポンビー商会」という洋服生地 of 卸売りをする会社で働いた。ユダヤ人が経営していた会社で、ちょうどイスラエル建国の時だったから、支部が団結して「潜水艦を1隻、国のために寄付するんだ」なんて言いながら、真剣にビジネスに取り組む人たちがいたんだよ。場所は、銀座の資生堂の斜め向かいだった。

その少し先に、「天國（てんくに）」って天ぷら屋があった。これは今でもあるな。そのさらに先に「新橋」という橋があり、その橋を渡ったところに「日東証券」があった。手元の資金を株で殖やそうと考え、その日東証券に行ったわけだ。

さすがに、何も知らずにいきなり株を買うほどの勢いはなかったから、何度か店に足を運んでみると、ある日、日東証券の人に声をかけられたんだ。

「お兄さん、株買いなよ。まだ上がると思うよ」と。

オレは「どれがいいの？」なんて聞いて。まあ、今では想像できないくらい、のんびりとした会

話だったな。

1991年まで指定銘柄制度というのがあって、平和不動産や旭化成など、代表格とされる一部の銘柄で、信用取引の条件が有利になるというのがあったよな。その前身となる制度として当時は、特定銘柄制度というのがあったんだ。日東証券の人はそれらの銘柄を挙げて、「どれでもいいよ。大丈夫だと思うよ」なんて言うんだ。そんなやりとりをしながら結局、平和不動産を10株、92円50銭で買ったのが最初の取引だった。

——その後、継続して売買するようになったの？

その10株は思惑通りに値上がりして、利食いになった。その後も三菱重工などいろいろな銘柄を手がけて取ったり取られたり……でも、トータルでは利益になっていたな。これが昭和23年（1948年）、63年前のことだ。

スターリン暴落の時は、たいへんだったなあ。昭和28年（1953年）に旧ソ連の最高指導者、ヨセフ・スターリンが死んだことで、戦後復興や朝鮮戦争の特需を背景に上がっていた株価が大暴落したんだ。朝鮮戦争の終結が早まるという観測が悪材料で、主力株や軍需関連の銘柄に売りが殺到したわけだ。

—— 売買の方法などは、どうやって学んだの？

本を読んだ。きちんとした本が、けっこうあったんだよ。現在とは出版業界の構造もちがうわけだけど、今よりも真面目な本が多かったという印象だなあ。

チャートが載っている新聞、今のチャートブックのようなものがあって、そこで値動きを見たり、手法の本を読みながら自分でチャートを描いたりしていたね。

—— そのころは、まだ相場の業界にはいなかったの？

イスラエル建国で、働いていたエー・ポンビー商会はなくなった。国ができたから、引き払ってイスラエルに移ったんだよ。

おふくろの妹が京都の織り元（織物の製造業者）に嫁いでいたので、そこで作ったちりめん※を売って歩くのが本業だった。それと同時に、大同証券というところで営業の下請けをやった。「客外交」と呼ばれていたよ。今ならば違法行為なんだろうけど、その当時はモグリではない。まっとうな立場だったんだ。

でも、そんなオレを見た人が、声をかけてくれたんだ。隆昌（りゅうしょう）産業という商品会社の社長だった小島さんが、「そんな中途半端なことをしていないで、うちで働かないか」と。それがきっかけで、商品会社で営業の仕事を始めたのが、昭和30年（1955年）だ。

※ちりめん

高級呉服や風呂敷などに使われる、絹の織物。

4. 台所のない家

——その時点では、それなりの相場経験があったわけだね。周囲に、まっとうな相場技術を教えてくれる人がいたの？

例えば、オレが書いた『脱アマ相場師列伝』に出てくる「安さん」だね。隆昌産業に入る前に、セントラル証券の店先で知り合った人だ。

当時の証券会社では価格を記入する黒板の前に長イスが並んでいて、そこに大勢の投資家が座って、相場を見ていた。だから証券会社に行けば、ほかの投資家と知り合う機会があったんだ*。

セントラル証券は木造2階建ての古い建物で、いろいろの人が来ていたなあ。中にはきちんと勉強している人やプロの相場師もいて、その中の一人が安さんだった。

とにかく「売り」しかやらない人だったが、一対一で相場のことを教えてくれたよ。たまに食事をするときには、だいたい郵船ビルのコーヒー屋で、お勘定はいつも安さんが払ってくれた。

株の面白さと同時に、相場の恐ろしさ、そして兜町という街で生きる術みたいなものを教わった

ね。「株と闘ってはいけません」とか、大切なことをたくさん伝えてくれたから勉強になったよ。

売買のやり方を教えてくれることもあったが、どちらかというとなれの自主性を重んじ、「自分で決めることですよ」なんて感じで、細かいことは言わない人だった。

隆昌産業に入ってから、相場の勉強をする環境に恵まれていた。よど号ハイジャック事件[※]の時に乗客の身代わりになって北朝鮮まで行った山村新治郎さんも、オレに相場を教えてくれたうちのひとりだ。千葉県で代々、米穀商を営む家に生まれ、家業の一環として相場の世界にいたような人だった。オレは隆昌産業に所属する歩合の外交員だったけど、周囲の人はごくふつうの社員、仲間のひとりとして接してくれたので、いろいろなつき合いがあったよ。

※証券会社の店頭

私（筆者）が証券界に入った1980年代後半も、多くの中小証券の支店は、輝太郎から聞く店頭の風景と同じような状況だった。後場が始まる時間（当時は13時）には、ランチあとの常連客がイスに並ぶように座って「後場も頼むよ〜」などと大きな声を出したり、隣の人に「社長、あんた何買ってるの？」などと話しかける様子を私は毎日眺めていた。

※よど号ハイジャック事件

1970年に発生したハイジャック事件。当時、運輸政務次官を務めていた山村新治郎がソウルに行き、犯人との交渉の末、人質の身代わりとなって犯人たちと北朝鮮に飛んだ。その後、解放されて帰国した。この英雄的な行動で有名になった。

——隆昌産業は、小説『赤いダイヤ』で有名な小豆買い占めの旗艦店でしょ？

正確には、いくつかあった旗艦店のひとつだな。昭和32年（1957年）に三菱商事や隆昌産業の小島社長などが組んで小豆を買い上げ、最後の最後で負けたんだ。ニセの倉荷証券が発行され、納会の日に驚くような暴落をみせて一巻の終わり。オレは、それを目の前で見ていたんだ。

そういえば、『赤いダイヤ』を書いた梶山季之さんに新宿のクラブで声をかけられたことがあったよ。「小説で使っている相場用語をチェックしてほしい」という話で、オレは快く手伝ったんだ。小説のまえがきにも、どこにも、オレの名前は載らなかつたけどね（笑）。

そんないきさつもあったが、あの小説で気に入らないのは、実際には無関係だった児玉誉士夫が押田義男なんて名前で登場していることだ。オレが目当たりにした事実とは違うし、小説とはいえ、それが実際の話として認識されているあたりが釈然としない。

——小豆の買い占めには、自分でも乗ったの？

もちろん。たつぷりとな（笑）。だから最後の最後で、一文無しになった。

終戦から10数年たって世の中も落ち着き、仕事も順調。だから周囲の人から、「こんどは嫁さんだな」なんて言われて……。住んでいた高円寺の土地は借地だったのでそれを買い取り、ちょうど新しい家を建てていた時だよ。大工に払う残りのカネも相場で消えたから、天井はペラペラの板を

張っただけ、最後に造る予定だった台所は中止——中途半端な状態で工事を終了するしかなかった。翌年の昭和33年（1958年）に結婚したが、台所がないので、料理も洗濯も庭の井戸の脇だ。今となっては思い出だがな。

——その大負けを、どう感じた？ 相場に対する考え方を大きく変えるような出来事だった？

いや、単に「負けた」というだけだった。反省はあったが、相場に必然の「勝ち負け」の「負け」という、意外とあっさりした感覚だったな。だから、「また相場で取り返そう」という気持ちしかなかった。

親子だから、戦後にヤミ屋をやっていたことなどを断片的に聞いていた。しかし、あらためて話してもらうと点と点がつながり、戦後の混乱とその中で前を向いて生きていた、エネルギーに満ちた姿が目に見えんだ。

昔の実家は天井の一部がひどく安ものの板張りで、湿気で波を打ったり、めくれ上がったりしていた。「カネがなくなっただ」なんて説明を聞いた記憶はあったが、細かい経緯までは知らなかった。

狭い庭には井戸があり、鉄製の手押しポンプが備え付けられていた。季節に関係なく一定の温度の水が出てくるので、夏場の水遊びは楽しかった。手押しポンプの向かい側には電動ポンプがあり、地面の下で井戸とつながっていた。

私が物心ついたころは、さすがに台所があり、流しの蛇口をひねると、一般の水道と同じように井戸水が出て、庭の電動ポンプがウィーンと音を立てて連動した。私が生まれたのは昭和38年（1963年）だから、赤いダイヤの失敗などは完全に「歴史物語」である。

私が相場を始めてから教わったことは、こういった歴史の末にある完成形のようなものだろう。だから、このインタビューで勉強の経緯を聞いてみたかったわけで、そこで父が学んだ先人たちの歴史も、のぞき見てみたいと思っていたのだ。

このあと、安さんとの出会いから始まった「技法の勉強」について聞いた。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

58 ページにとびます

日常生活では、ほんの少し想定外のことがあっただけで、考えられないほど何もできなくなってしまうところがあった。ところが戦後の混乱期にヤミ屋を営み、それなりに立ち回っていた。

とにかく、いろいろな経験から自分の強みを再認識し、プレーヤーとして活動しながら投資家の指導を行うという道を選んだわけである。

8. 職人の売買、うねり取り

——唯一うまくいったのが相場……とはいえ、赤いダイヤの時は買い方で参加して負けたんだっだね。その大損のあと、どうしたの？

工事は中途半端だったが、生活できる状態の自宅が残った。借地だった土地も買い取っていた。でも現金がない。だから、ふだんの生活に必要なカネもない状態だったわけだ。そんな時、オレに相場を教えてくれた実践家たちのひとり、山本真一さんという人が、なんと売買の資金を貸してくれたんだ。

しかし、2つの条件を与えられた。1つめは、「生活費などに使わず、相場の資金としてのみ利用する」ということ。2つめは、「基礎的な売買の練習をしろ」という指導だった。

お金を貸してくれたうえに基礎の練習をするように忠告されたのだから、ストレートに「このヘタクソ!」と言われるよりも、ずっと強烈に響いたよ。赤いダイヤの直後だから、まだ隆昌産業のセールスマンとして働いていたころだ。

オレは、言われた通り、小豆で単純な売買を繰り返した。「1枚、1枚」、あるいは「1枚、2枚」という2分割で仕掛け、それを一括で手仕舞いする練習だ。

——「つねり取り」という枠組みの中の練習だね?

そうだな。小豆は穀物だから毎年、新物が収穫される。季節によって需要も変化する。つまり、ある程度の季節(期節)的な変動があるわけだ。それを基にした売買だから、いま流行の超短期売買で回数をこなすようなものではない。でも、この練習売買によって、いくら頭の中で考えてもわからないこと、売買の軸になる大切なことを学んだな。

——それはなに?

説明するのが難しいんだ……「やればわかる」「やらないとわからない」みたいな答えになっちゃう。いくらなんでも乱暴だと言われてしまうが、実際にそういう体験した者だけがわかる。感覚だな。おまえなら、わかるだろうが……。

例えて言うなら、食べ物の味かな。パイナップルを食べて「甘い」「おいしい」と感じるが、その甘さを言葉にすることは困難だし、1回や2回食べただけでパイナップルのおいしさを本当に理解するかという疑問だろ？ 実際は、イヤになるくらい食べないと、本当の味なんてわからないはずだ。

「大切な学び」について、強いて言えば、単純な基礎練習によって、損切りができるようになる。ということが挙げられるな。オレは、基礎売買を1年半ほど繰り返し返したところで、「基礎ができた」と感じた。

予想なんて当たったり外れたりだから、予想が外れた、あるいは手が合わないときは建てた玉を切って出直すしかないわけだ。だから、損切りは重要だ。オレは、「基礎ができた」と同時に「損切りを淡々と実行できるようになった」と感じたね。

ところがその後、調子に乗って売買数量を増やしたら、できると思っていた損切りができずに痛い目に遭った。「淡々とできる」なんて感じる、そんな自分への褒め言葉が頭に浮かぶうちは、まだ淡々としていない、できていない状態なんだろうな。

——読者から、「林輝太郎先生の本には、損切り」という言葉があまり出てこない」という感想を聞いたことがあるけど……。

損切りは大切な観点だから、ふつうに書いていると思うがな。もし、そう感じる人がいるのなら、流行のデイトレードの本が影響しているんじゃないか？

多くの人の興味に合わせて書かれた本は、売買を「仕掛け」「手仕舞い」と短絡的に片づけてしまっているわけだ。「株の買い方」だけを説いたものよりはマシだが、売買の数量や分割売買といった大切な視点が抜け落ちている本が多い、そう感じるね。

加えて、狙いが短期になるほど「当てよう」という方向に傾くから、数量とか数量の調整に目を向ける姿勢がますます薄くなってしまう。

オレにとって売買とは、まずは試し玉を入れ、動きを見ながら本玉を建てていくというもの。だから、極端に言ってしまうえば、損切りは試し玉の段階で行うことで、本玉を建て始めたあとは損切りをする必要がないんだ。

それに、試し玉から本玉という進め方をするだけで、「ダメだったら撤退」という考え方が黙っていても盛り込まれる。

こういったことから、短期の売買について説明されたものや、数量という要素を無視した説明の中で、「私の説明はとても実践的ですよ」と言わんばかりに、必要以上に「損切り」が強調されるんじゃないだろうか。

——基礎の練習というのは地味だから、多くの人が嫌がるよね。

オレは自分の経験から、単純な基礎練習をしなさいと多くの人にアドバイスしている。でも、大部分の人は苦行のように感じるらしく、「どれくらいの期間ですか?」と切り返してくるよ。

経験が少ない、あるいは技術がない段階で大きな資金を動かすほうが苦行ではないかと思うが、オレ自身もそうだったように、すぐに大きな売買をしたくなるものだ。でもガマンして、最低でも2年間は基礎の売買を繰り返し返すべきだ。その基礎の売買によって土台が固まるから、経験を積みながら技術を身につけていく器ができる。

——商品会社の営業マン時代の練習売買は、いわゆる〆手張り〆だよな?

そうだけど、その当時は現在のように、従業員自身の売買を制限するルールなんてなかったから、法的な問題もなければ、コンコンやらなければいけないといったマイナス面もなかったんだ。

でも今は、家族も親類も売買したらダメなんて極端な禁止ルールを設けている証券会社や商品会社があつて、事故を防ぐために〆とにかく売買させない〆という方向に大きく傾いているな。

そういったことの是非はともかくとして、当時、少なくとも規模の小さい店(証券会社、商品会社)では社長が、「1枚、2枚でもいいから、自分で売買しろ」と手張りを奨励していた。自分が知らないものを客に勧めるのはおかしい、という論理だよ。

一時期の証券会社では「手張り」という言葉を、「お客さんの資金を勝手に使う自己の売買」という意味で使っていたみたいだな。

カネの魔力と人を管理することの難しさをあらためて考えさせられる部分だが、オレにとって手張りという言葉は、業者としての正しい姿勢を基礎とした、とても純粹な個人の売買だよ。それぞれの判断で勝手にやればいいと思うんだが、そうもいかないようだなあ。

ヤマハ通商のころ、それから現在の林投資研究所を設立したあとは、自分の立場を考えて売買を控えていた時期があった。それは、自分自身のバランスを考えた対応だったわけだが、その時期でも基礎売買の練習を繰り返していたよ。

相場の資金を失ったあと、借りたカネで基礎売買の練習を繰り返した輝太郎は、うねり取りを中心に相場の実践を続けながらも、さまざまな観点で売買全般を研究し、実践を重ねてきた。

インタビュ어의最後では、その研究・実践の経緯とともに、相場とどう向き合うべきかという哲学を聞いた。